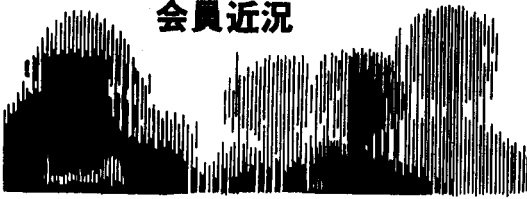


## 会員近況



広島県立広島工業高等学校(数学科) 榎田 洋

約15年前にORと出会い、その後、商業高校の商業科目である「経営数学」を研究することになりました。

その内容は(1)経営管理と数学(2)推定と検定(3)需要予測(4)配分(5)在庫管理(6)待ち行列とシミュレーション(7)日程計画で、ORの入門程度をとり扱っていました。

高校の教育課程は来年度から改訂になり、工業高校では専門教科に「工業数理」という新しい科目が設けられました。この科目は工業の専門教科の内容のうちで数学と関連の深い部分をとりあげてできた科目であって、いわばケース・スタディの要素を多分に含んでいます。

数学と専門教科の合の子のような存在でして、従来の応用数学とは少し異なっています。その目標は“工業の各分野における具体的な事象を、数理的、実際的に処理する基礎的な能力を養う”としています。ORとしては次のような内容です。

- 時間とともに変化する事象のモデル
- 予測と計画に関する基礎的な手法
- 情報と制御に関する基礎的な計算技術

OR会員として研究発表もできませんが、ORを愛するゆえに会員の末席をけがしている者の近況です。

電電公社近畿電気通信局  
経営調査室

大西 正和

商用 TSS(DEMOS-E)のSE担当からOR担当へ転じて1年有余、この間、政策科学の研修、「コンピュータによるOR実務セミナー」の実施やそれに関連するコンサルティング、経営分析への変量解析の適用、他企業におけるOR、統計多変量解析事例の調査などを手がけているうちに早くも十数カ月が経過しました。また、昨秋には、DEMOS-E ユーザーの方とOR学会研究発表会でパス解析の適用事例を発表させていただきました。

一方、私的活動では、約3年あまり断続的にまとめた「需要予測とコンピュータ・プログラム」もようやく

1982年1月号

く脱稿間近となりました。ちょっとPRめきますが、春日井博、大石展緒、円山由次郎氏らの良書に伍して独自の存在価値あらしめるよう努めております。

さて、話は変わりますが、日本におけるORの萌芽は、1952年のMethods of Operations Researchの輪読会、1953年の日科技連でのORセミナー開始あたりであって、第二次大戦敗戦前の日本にはORを培養する土壌がなかったというのが通説化しているようです。

しかし、第二次大戦中に日本でも実は陸海軍の要請もあって、工学、数学、医学、農学など各分野の専門家チームが、軍需品の生産計画、在庫問題、取替問題、船団の輸送問題、準備数量などにORという名称こそ使用していないものの、実態的には英米のORと類似した研究がなされ、かなりの成果をあげ、さらに当時のメンバーの中には、戦後のORの発展に貢献された方々がおられるとの証言があります。[先日、当時の関係者であられるS先生に質問させていただいたところ、「米国数理統計学会の戦争準備委員会の報告」の訳文(1942年出版)や回顧録などをご送付くださいました]

いろんな理由で当時の実情の多くは埋もれていることと思います。史実は史実として日本におけるORの真の歴史的起源を明らかにするため、OR学会でも当時の資料、関係者のメモワール等を、今こそ組織的に収集し、本誌などで紹介されてはいかげでしょうか。日本のOR史、いや日本の現代史に意外な新事実が加わるものと期待されます。

東北工業大学電子通信工学科 安藤 二郎

本学では、56年度からカリキュラムが改訂され、3年次から通信工学科が通信コース、情報コース専攻のどちらかに分れることになっている。情報コースの関連科目には、計算機工学I、II、III、情報理論、通信理論、システム工学、順序回路、数理計画法などの開講が予定されている。準備にもなると思い、4年生のゼミの中で、H. Anton, B. Kolman 著のApplied Finite Mathematicsを読んでいる。LPの具体例が豊富に入っており、初学者にもよくわかりおもしろく読める。極値グラフ理論に興味をもっており、K4-saturated graphについてあれこれ考えている。マイコンもあるので応用を考えている。